

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 包 海岩

論 文 題 目

社会主義中国内モンゴルにおける牧畜文化  
—社会主義的集団牧畜から資本主義的酪農文化へ—

### 論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	嶋田義仁
委員	名古屋大学	教授	山本直人
委員	名古屋大学	准教授	佐々木重洋
委員	名古屋大学	准教授	東賢太郎
委員	静岡大学	教授	大野旭
委員	帯広畜産大学	准教授	平田昌弘

## 論文審査の結果の要旨

(本論文の概要) 1947年に内モンゴル自治政府を設立した内モンゴルは、1949年より社会主義中国の自治区となった。その期間は、65年におよぶ。中国社会主義政策およびその後の改革開放経済政策により、内モンゴル牧畜文化はいかに変動し、今どのような姿にあるのか。この問題に本論文は、内モンゴルの1947年以降の家畜統計分析と、伝統的家畜利用体系の分析によって取り組んだ。本論文は3部からなる。

第1部ではまず、内モンゴル自然環境を分析し、内モンゴルを6地域に整理する。高原4地域(モンゴル高原3地域とオルドス高原)と、河谷平原2地域(黄河流域と西察河流域)である。そのうえで、まず1947-2007年間の5畜(ウマ、ウシ、ラクダ、ヤギ、ヒツジ)飼育頭数統計分析をおこない、その歴史的变化を図表化し、5畜全体頭数と家畜夫々の飼育頭数との変化を解明した。そのうえで本論は、5畜飼育頭数変化と中国政治政策の転換との対応をさぐった。すなわち、家畜数は①文化革命開始期(1866)までは増大期、②文化革命・人民公社期とその解体後しばらくは停滞期、③天安門事件(1989)以降の改革開放時代の激しい急上昇、と変化した。この変化には、5畜中心牧畜からラクダ、ウマが脱落し、肉、乳、毛、皮革という商品畜産を可能にするヤギ、ヒツジ、ウシの3畜中心牧畜への移行、伝統的牧畜地域(内モンゴル高原)から、北方寒冷地フルンボイルや農牧地域通遼など、牧畜生産が不活発であった他地域への、家畜生産地拡大、もともなった。論者はそれ故このような変化の背後にあるのは、集団所有基本の社会主義的牧畜から、家畜と牧草地の私有化(1985年に始まり、1997年には牧草地の全面私個人使用権化)によって促進された、牧草地・家畜の私有に依拠する「資本主義的酪農文化」へと変動であるとする。

第2部第3部では、一転、内モンゴルの伝統的牧畜で維持されてきた5畜利用の詳細が論じられる。論者は家畜利用を、「家畜の屠殺後の利用」「家畜を生かしたまま利用」「畜フン利用」に分ける。考察されるのは、畜産品として知られた肉、乳、毛、皮の利用に限らない。血、内臓、蹄、骨髄、脳、骨、角、尿、痰、牡臭、耳垢、目脂の利用にまで考察がおよび、家畜が全利用されてきたモンゴル牧畜文化の伝統的家畜利用体系があきらかにされる。論者はなかでも畜フン利用の重要性を強調する(第3部)。寒冷気候にあるモンゴルの草原には燃料とする樹木が少ない。畜フンはそれ故暖房・料理に必要なエネルギー源であった。畜フンはあつめられ住居の横に大量に蓄積される。ゲルの屋根から昇る畜フン煙はモンゴル人にとって故郷のシンボルだという。その畜フン文化を、著者は徹底的に観察し分析した。畜フン採集の民具から採集・運搬・貯蔵方法、5畜や季節によって異なる畜フンの分類方法、畜フンの様々な質、名称体系。さらに畜フンと、医療、遊び、ラマ教やシャーマニズムなどの宗教との関係まで論じられ、畜フン文化がモンゴル牧畜民文化の主要な構成要素であることがあきらかにされた。本論文はかくして、酪農化という内モンゴル牧畜の急激な近代化と、消滅しつつある内モンゴル牧畜文化の総合的な家畜利用体系を明らかにする。

## 論文審査の結果の要旨

(本論文の評価) 本論文は、65年に及ぶ社会主義中国における内モンゴル牧畜文化動態を、まず、1947年以降の内モンゴルにおける家畜統計の収集という基礎的な資料収集とその分析に基づいて明らかにしたことである。社会主義体制下における牧畜文化の変動は厳しかった筈であるが、その変動の内部に立ち入った研究は意外と少ない。本論文は、それゆえ社会主義中国における内モンゴル牧畜文化動態論の基礎的先駆的研究として評価しうる。

本論でとりわけ評価すべきは、1947年から現在に至る5畜総数の激しい歴史的変化と社会主義政策の変化との対応を明らかにした点にある。すなわち、①文化革命開始期(1866)までの家畜数増大期、②文化革命・人民公社期の停滞期、③改革開放政策実行期の天安門事件(1989)以降の急上昇期である。この急上昇の背後には、ヤギ・ヒツジ・ウシという酪農型家畜数の増大、伝統牧畜地域以外の寒冷地や農牧混合地での家畜数の急上昇もある。そこにみられるのは、家畜・牧草地の私有化(個人使用権)政策とそれによって促進させられた、集団的社会主義的牧畜から集約的酪農型牧畜の進展だという、論者の指摘はかなり説得的である。「酪農」という言葉は「私有化」同様内モンゴルで使用されていないが、今後の内モンゴル牧畜文化研究の論議を活性化させうる論点である。

本論の第二の功績は、5畜の利用体系の詳細を明らかにしたことである。その観察は緻密であり、内モンゴルで赤食と呼ばれる肉、白食物と呼ばれる乳、毛、皮という工芸原料利用の詳細のみならず、血、内臓、蹄、骨髄、脳、骨、角、尿、痰、牡臭、耳垢、目脂の利用まで論じて、家畜と畜産物の急速な商品化に反して、家畜がモンゴル文化において総合的に利用されてきたことをあきらかにした。中でも畜フン利用の重要性が指摘されたことの意義は大きい。寒冷な気候と樹木少ない草原のモンゴルでは、畜フンは最も重要なエネルギー源であったからである。その畜フン文化が、畜フン採集の民具から採集・運搬・貯蔵方法、畜フンの多様な質とその分類方法、名称体系、さらに畜フンと、医療、遊び、ラマ教やシャーマニズムなどの宗教との関係に至るまで論じられた。このような総合的な畜フン文化論は、世界の牧畜文化研究にもみられず、化石燃料以前のエネルギー源としての畜フンをあきらかにした意義も大きい。

本論には異なった二つの論点があるゆえに、全体としての意図が不明だという批判もあったが、内モンゴル牧畜文化の急激な構造的変動とともに、モンゴル牧畜文化がねりあげた伝統的5畜利用体系を明らかにした本研究は、内モンゴルの現代牧畜文化が直面する、近代化と伝統の相克・分裂をあきらかにした優れた研究として評価できる。本論文は図表を多用して多様な資料の分析に取り組んだ研究であるが、その分析の明晰さと正確さにも高い評価があった。

以上の理由により、本論文は、一同、博士論文として合格とした。